

## 審査員特別賞

法学部 政治学科 3年

田代雄人さん

『砂の女』／安倍公房著／新潮社

砂にも劣らない微細胞の活気が、砂と共にくぐもく。男は、とある用事で訪れた村落で、砂の牢ともいえる家に閉じ込められてしまう。そこには未亡人の女が住んでいた。男は、そこから脱出を試みる。男は、砂を相手に必死でもがく。だが、うまくいかない。女はそれを喜ぶ。砂にくぐもった女の精神。男は、それを蔑む。男は、砂に枷をはめられていない頃の現実を回想する。幻想郷のようにそれを懐かしむが、一方で男は同僚から疎まれる存在でもあった。男のうめき声は砂に劣らんが、勝りもしない。女は思考回路を砂に支配されている。女のように砂の奴隷になりたくない、男は奮闘する。女は、刻々と過ぎていく時を、砂とそして男と共に在りたいと願う。男は、砂という鏡を前に己と向き合う。女と男が織りなす肉体の流動と精神の流動。そして、砂の流動。これらが泡沫のように手からこぼれると思えば、井戸水のように湧き出てくる。そんな物語。